The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	シンポジウム報告　『語文』をめぐる回顧と展望 ：この三〇年をふり返る
Author(s)	
Citation	語文. 2014, 102, p. 12-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70932
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

シンポジウム報告

『語文』をめぐる回顧と展望

――この三〇年をふり返る――

日時　二〇一四年一月一一日（土）
場所　大阪大学豊中キャンパス　大阪大学会館講堂
パネリスト　前田富祺・伊井春樹・福田安典・仁木夏実・出原隆俊
司会　金水　敏

シンポジウムの趣旨

金　水　　敏

『語文』百輯記念及び年二回刊行体制になってから三〇年となったことを記念する企画として、平成二六年一月一一日の「大阪大学国文学会大会」において、シンポジウム「『語文』をめぐる回顧と展望―この三〇年をふり返る―」を実施いたしました。『語文』の発展に寄与してこられた教授、助教、また学生の立場から、『語文』についての回顧と提言を語っていただこうという趣旨です。会場は、平成二三年に改装なった大阪大学会館（旧イ号館）講堂です。パネリストは以下の通りです。

前田富祺（国語学）昭和五二年着任・平成一三年退職（名誉教授）

伊井春樹（平安文学）昭和五八年着任・平成一六年退職（名誉教授）

福田安典（近世文学）平成四年大学院単位取得退学、平成四年～六年助手就任

仁木夏実（漢文学）平成一五年大学院単位取得退学、平成一九年～平成二一年助手就任

出原隆俊（近代文学）現役教授

司会・進行は、私金水敏（国語学・現役教授）が担当いたしました。

百輯を迎えて、堂々たる日本文学・国語学専門雑誌の地歩を築きあげた感のある『語文』ですが、実は関わられた先生方や院生らの熱意とたゆまぬ精進や、印刷会社のご尽力等内外のご助力があってこそ今日があるもの、と改めて気づかされました。また院生の減少による執筆者不足や電子化の問題など、重い課題も示され、充実したシンポジウムとなったように思います。改めて、ご

登壇の先生方およびフロアの参加者のみなさまに感謝申し上げます。

さて今号では、シンポジウムでご登壇いただいた先生がた全員のご寄稿をいただくことができましたので採録いたします。今後の『語文』の行く末に思いをはせつつ、お読みいただければ幸いです（また『語文』第七四輯に掲載されました、田中裕先生〔本学名誉教授〕のご講演記録「国文学科の思い出」を併せて読んでいただくと、いっそう興味深いかと思います）。（以上）

（きんすい・さとし　本学大学院教授）

『語文』をめぐっての回想

前田富祺

（一）草創期とその後

このたびは「『語文』をめぐる回顧と展望―この三十年をふりかえる―」ということで、私にも話をするようにとお声がかかりました。

物置にしまってある資料を探して調べているうちに、体調不良で検査をし狭心症で入院治療が必要になりました。入院と入院の間に話をすることになったので、パネラーを交替してもらうことも考えましたが、国語国文学会の日も迫っていましたので、新しい資料を探すことは諦めて、『語文』をめぐる私的な回想を述べることで他の方々のお話の前座をつとめさせて頂くことにしました。

私が大阪大学に着任しましたのは、昭和五十二年（一九七七）のことで退官したのが平成十三年（二〇〇一）のことですから、ここで対象としている三十年間の半分は直接関わっていないのです。しかも、『語文』についての印象のもっとも鮮明なのは着任後の十年ほどの間にあったことです。したがって、与えられたテーマとはずれることになりますが、私の経験したことを中心に話させて頂きます。

ここで三十年というのは、『語文』が年に二回刊行されるよう

になってからのことですが、それの意義を考えるためには、それまでとの違いをはっきりさせることが必要です。

『語文』第一輯は昭和二十五年（一九五〇）十一月の刊行です。執筆は宇佐美喜三八、犬養孝、田中裕、小島吉雄、林和比古、八木毅の五先生で、この五先生が編集委員となっておられます。第一輯が四八頁であるのに対して、今回平成二十五年十二月（二〇一三）に刊行された百輯記念号は一八二頁で雑誌というよりは本ともいえるものとなっています。その間の『語文』の発展が伺われます。

私は大阪大学に着任するとすぐに『語文』を読みたいと思いました。当時の助手の黒木祥子さんにお願いして残部を探して頂いたところ既刊号のほとんどを揃えることができました。二十五年前からの雑誌が大切に保存されていることに感銘を受けたのです。その時の印象は、『国文学科草創のころ』をまとめるために、小島吉雄先生、田中裕先生、八木毅先生にお集まり頂いた時のお話[1]で深められました。

創刊のころの先生方の『語文』への力の入れ方は大変なものでした。たとえば、頁を書店の要望に合わせるために、原稿が足りない時に宇佐美喜三八先生が原稿を書いて補うとおっしゃったという話[2]が残されています。

第一輯は昭和二十五年（一九五〇）十二月ですが、以後昭和二十六年（一九五一）から昭和三十年（一九五五）まで一年（一年度）に三冊ずつが刊行されています。

しかし、その刊行の継続は並大抵のことではありませんでした。最初は林和比古先生の御紹介で邦進社の前田春雄氏が発行者でしたが、その廃業に伴い昭和二十八年（一九五三）七月にはその兄の前田勘治氏の文進堂で発行されることになりました。

私が大阪大学に来たころには、年に一回、国文学の田中裕先生、信多純一先生と国語学の宮地裕先生と私の四人の教官が揃って、文進堂の前田勘治社長を迎える会をやっていました。場所は淀屋橋に近いところにあった現長という鰻屋です。最初、田中裕先生から『語文』の刊行などについての御報告があって、前田社長への御礼のお言葉がありました。その後は前田社長が持って来られた金粉入りのお酒を飲み、鰻を食べながら四方山話をしておりました。長く続いて来た国文学の先生方と前田社長との親しい交りの感じられる場面でした。そういう人間関係の中で『語文』のような商業ベースに乗らない雑誌の刊行が続けられてきたのです。[3]

しかし、年に三冊の刊行は困難になってきて、昭和三十一年（一九五六）には第十七輯一冊しか刊行されませんでした。昭和三十二年（一九五七）、昭和三十三年（一九五八）には二冊ずつ刊行されましたが、昭和三十四年（一九五八）から昭和三十六年（一九六一）には一冊ずつしか出されていません。そして二年の間をおいて、昭和三十九年（一九六四）に小島吉雄先生が退官されるに際し、第二十五輯を記念号として刊行することになったのです。休刊となったことにはいろいろな事情もあったかと思いますが、編集の実務を担当しておられた宇佐美喜三八先生の御病気

ということもあったようです。これが小島吉雄先生の退官の記念の本を出さなければということをきっかけに復刊されたわけです。以後、昭和四十一年（一九六六）、昭和四十二年（一九六七）、昭和四十三年（一九六八）と毎年一冊ずつ刊行されました。そしてまた間をおいて、昭和四十六年（一九七一）の犬養孝先生の退官記念号を出すために復刊ということになります。

以後も昭和四十八年（一九七三）が林和比古先生の退官記念、昭和四十九年（一九七四）が池上禎造先生の退官記念、昭和五十四年（一九七九）が柿本奨先生の退官記念、昭和五十六年（一九八一）が田中裕先生の退官記念となり、『語文』は先生方の退官を記念するために、大阪大学関係の先生方の論文を集めるとともに、卒業生や大学院で研究に志す者の論文発表の場を作ることとなったのです。

『語文』は最初、大阪を中心として、広く一党一派に偏らない国文学研究の発表誌となることを目指してきたのですが、大学の教官ばかりでなく、前田金五郎氏（当時、泉高校勤務）、三上章氏（当時、山本高校勤務）など、高校に勤めていて、研究に志していた方も投稿されていたのです。小島吉雄先生は「ああいう人が『語文』を育てられた」とおっしゃっておられます。

私などは学生時代に主語、述語の考え方に染まっていたものですから、三上章氏の主語抹殺論に接した時にはショックを受け、三上章氏の名前を記憶していたのです。『語文』の草創のころの雑誌を読んで、『国語学』だけでなく、『語文』にも書いておられたのだということにあらためて気づかされました。

（二）新しい時代に

先に述べたように、このころは先生方の退官記念号などをはじめとして次第に『語文』の論文にも卒業生、在学生の活躍が目立つようになってきていたのです。ここには大阪大学の大学院が充実し研究に志す卒業生が増えたこととともに、社会的な情勢の変化のあったことが考えられます。

草創のころ、『語文』編集に携わった先生方が退官された時期は、新しい先生方をお迎えする時期になったことを意味します。国文学には昭和四十三年（一九六八）に信多純一先生が着任されました。また国語学講座が増設され、昭和四十年（一九六五）には池上禎造先生が着任され、昭和四十二年（一九六七）には宮地裕先生が着任されました。創刊のころの編集方針が見直される時代となったのです。

また、このころいわゆる大学紛争があって、大学の在り方自体が反省される時代に入っていました。全国どこの大学でも大なり小なりその影響を受けておりました。私は昭和五十二年（一九七七）に大阪大学に着任したわけですが、ある日私が研究室に行くと、教養部長が私の研究室の窓から教養部の学生がデモをしているのを眺めておられたのでびっくりした記憶があります。田中裕先生が文学部長をなさって苦労なさったことは後に仄聞しましたが、このころまで大阪大学でも大学紛争の名残が残っていたわけ

です。それ以前の文学部が大変な状態であったことが想像され、『語文』の刊行にも何らかの影響があったと思われるのです。

このようにして『語文』の新しい時代に入ったわけですが、時間も経ちましたので、後はこれから話される先生方に補って頂くとして、私の記憶に残っていることをまとめておくこととします。

『語文』の刊行は昭和五十八年（一九八五）から年に二回となり、国語学を主とする号と国文学を主とする号に分けられました。刊行の主体も昭和六十二年（一九八七）には大阪大学国文学研究室から大阪大学国語国文学会へと変わりました。それにしたがって刊行の規定もいろいろ変わりましたが、平成元年（一九八九）十二月にはようやく学術刊行物として認可されました。論文を多く集めた記念号を出す場合に二輯の合併号の形をとるのもこのことと関係があります。

文学部の創立のころは教育制度の改革期でした。『語文』の投稿規定には「原稿の内容は国語・国文学・国語教育に関するものであること」とありますが、このころ八木毅先生のアメリカの国語教育、フランスの国語教育などの論文が載せられたのもそのような時代を反映したものと思われます。しかし、卒業生の多くは高校教員になったにもかかわらず『語文』に国語教育の論文の載ることはあまりありませんでした。そこで宮地裕先生のお考えにそって昭和五十八年（一九八三）から国語教育部会を発足させ、卒業生にも発表してもらい多くの卒業生を集めることを目標としました。伊井春樹先生にも大変な御尽力を頂きましたが、いろいろな事情があって、昭和六十三年（一九八八）には休会することになりました。しかし、現在も国語教育の論文を載せる投稿規定がそのまま残っているわけで、国語教育というものをどう考えるかは問題になっているわけです。

国語教育と並んで日本語教育も問題です。これは国語学と日本語学はどうあるべきかということに連なり、留学生が多くなってきていることとも関わります。私の着任の前々年に大学院独立専攻の社会言語学に徳川宗賢先生が着任されました。日本語学の講義が不十分なので両方の学生が聴講できる科目を作るということになりました。そこで徳川宗賢先生と私とで、翌年の講義計画を提出する前に、講義内容、時間割などについて話し合いをいたしました。しかし、いろいろな問題があって将来の見通しが付けにくく、両方の学生が聴講できる科目を決め、それが重ならないように時間割を決めるぐらいのことしかできませんでした。この話し合いは数年続けましたが、いつのまにか立ち消えになってしまいました。国語学は学部の学生が入っているのに対し、日本学の方は大学院生のみで、しかも留学生が多かったこと、学科が決まるとそれを越えて他学科の講義を聞こうとする学生が実際には少なかったことなど現実にいろいろな問題がありました。そのうちに日本学の改組、教官の増加などもあり、調整は一層困難になりました。留学生の中にも『語文』に掲載される論文を書ける者が増えてきました。

いずれにしても、時代の変化に対応して『語文』の在り方を変

える様々な試みがなされ、私の着任したころから『語文』の新しい時代が始まったわけです。

注

（1）昭和五十六年（一九八一）九月二十六日、大阪府立労働センターに小島吉雄、田中裕、八木毅の三先生にお集まり頂き、宮地裕、信多純一、前田富祺の三人がお話を伺うという形で行いました。その録音を前田がまとめ直し、『大阪大学国語国文学会会報』別冊一として昭和五十八年（一九八三）九月に刊行しました。

（2）創刊のころのことについては、注（1）の『国文学科草創のころ』の他、田中裕先生が昭和六三年（一九八八）『語文』第五十輯に「語文五十輯を迎へるのに寄せて―創刊のころ」を書いておられます。

（3）注（2）の田中裕先生の「語文五十輯を迎へるのに寄せて」でも、前田勘治氏の三十余年に及ぶ誠意、世情に感謝の気持ちが表されています。

（まえだ・とみよし　本学名誉教授）

私の大阪大学国語国文学会とのかかわり

伊井春樹

一　赴任した当時

私が大阪大学とかかわるようになったのは一九八三年（昭和五八）四月からで、それまでは大阪の地を知ってはいても、大学を訪れたことはなかった。国文学研究資料館の創立当初から所属していた私のもとへ、前年の秋に大阪大学への転出話があり、当時の館長が抜けられると困るという事情で一年先延ばし案を出し、折り合って一年間は兼任することになり、前期は二週間に一度訪れての授業、後期は集中講義という体裁となる。このようにして四月一四日（木）に初めて訪れ、午後から学部の二週間分の授業、翌一五日の午前中に大学院の二コマ分を担当して東京にもどるという生活をしていた。授業に参加していたのは、学部生九人（一人は修士）、大学院生は三人であった。当時は、現在からすると、私自身のせいにもよるのだが、信じられないほど情報不足で、大阪大学の国文学講座に博士課程が存在することも知らなかった。ともかく、このような経緯で、東京の地に心残りはありながらも、翌年の三月末に大阪に引越し、四月から専任として教育研究に従事するにいたった。

私が赴任した当初は、国語学と国文学の二講座、宮地・信多教授、前田助教授、米川・山本助手、私を加えて六人であった。授

業は、教授は週に三コマ、助教授は二コマ、それと外部の方に依頼しての年に一度の集中講義とからなる。助教授は研究に専念できるようにと一コマ少なくなっているということで、私は学部と大学院を一つずつ担当していた。学部は三年生から専門へ進学し、四年生と一緒の授業、大学院は修士も博士も区別のない演習であった。私が最初に言われたのは、授業は専門性の強い内容とし、いくらむつかしくてもよいということであった。そのこともあり、前の年から授業の準備をし、ノート作りや資料の作成を進めていた。私は平安と中世文学の韻文と散文を交互にテーマとし、四年で一サイクル、同じ内容はしないことと、自分の専門分野は取り上げないということを自らに原則として課した。それだけにたえず新しい作品や資料、課題を取り上げる必要が生じ、夏休みから授業の準備をし、四月の開講時には一年分のプリントを配布することもあった。一年を終えた春にはその成果は論文となり、時には書き下ろしの本にもなった。卒業論文に近代をテーマにする学生もいたが、それは私の担当ということになっていた。

最近になって、当時の外国文学の同僚と話をしていて聞くところによると、すべての講義はあらかじめ毎回原稿を書いていたというので、私などはとても足元には及ばなかったと反省もする。ただ、在職して半ば過ぎたころから、私は大学のさまざまな役割を担うことになり、相対的に授業に対して手を緩めざるを得なくなってしまっていた。

二〇〇四年（平成一六）三月に、私は定年の規定により六三歳で退官した。国立大学の文部教官としては最後の年で、翌年からは国立大学法人となる。また、大阪大学では「退官」というのではなく、たんにその職を離れたにすぎなく、一休みして研究を再開する必要があるため、「退休」のことばが用いられていた。その後私は人間文化研究機構理事となり、国文学研究資料館館長を経て、現在は阪急文化財団に勤める身となっている。

二〇一四年度の大阪大学国語国文学会のシンポジウムで求められたのは、この学会の発足や大学改革の経緯、その他国文の講座にかかわることなどで、私は当時の記録をもとにし、できるだけその推移を記録しておくことにした。個体史でもあるため、大局的な見地とは異なるかもしれないが、諒とされたい。

二　大阪大学国語国文学会の発足

私が赴任した当初の『語文』の編集母体は、「大阪大学国文学研究室編輯」とあるように、研究室が中心となっての編集で、実務は助手が担当していた。国文学と国語学の論文を交替でまとめた年二冊、創刊時から文進堂が刊行していた。草創期の教授が、国語の参考書を文進堂から出していたことによるようで、経費の負担はしていなく、毎年の忘年会に社長の前田さんをお招きし、接待することが返礼だったようで、その場で少しなりとも金銭の提供がなされていたのかどうかは知らない。私の記録によると、一九八五年一二月一六日に、南の清兵衛で忘年会を催したとある。それからほどなく、文進堂では『語文』の経費をすべて負担する

のは困難になったようで、その対応について研究室では今後どのようにしていくのか相談があったように思う。

国語国文学の研究発表会はなく、国語教育部会という組織が存在し、毎年一月一五日の成人の日と、八月に高校の教員を中心とした現場報告のような会合が持たれていた。私は赴任した翌年の一月一五日に、府立労働センターにおける第一二回国語教育部会で「古典文学資料としての古筆切」と題して吉野切の講演をしている。この頃はまだ参加人数も多かったようだが、その後文学部の教授会室でするなど、衰退が顕著になっていったようだ。そのような時期と重なったのが、『語文』の継続問題で、研究室としては今後どのように対処するのかが話し合われた。講座費から捻出する案もあったようだが、いつまでも経費を出すこともできなくなると思案している場で、私は学会を立ち上げその機関誌とする提案をし、結果として具体的に組織化をするようにと求められることになってしまった。卒業生もあまり知らない私は、ともかくそれまでほそぼそとながら継続してきた国語教育部会を国語国文学会に発展解消し、教員、卒業生、在学生を会員とした組織化を図り、「会則」もすべて作成し、会費によって『語文』を機関誌に位置づけることにした。一九八八年一月一五日（金）の国語教育部会の総会で、私の具体的な提案が諒承され、三月刊の『語文』第五十輯から名称の変更となったのである。それから『語文』が百輯の刊行となっただけに、私としては感無量の喜びでもある。

三　『詞林』創行の経緯

私は国文学研究資料館の発足時から十一年近く勤務していたこともあり、比較的国文学の研究世界には通じていたつもりながら、大阪大学に関してはほとんど知識を持っていなかった。関西の風土にもよるのか、東京での競争的な雰囲気とは異なるとの思いがし、一人でも多く研究者を育てる必要性を痛感した。赴任するとすぐさま「大阪大学古代中世文学研究会」を勝手に立ち上げ、院生に研究発表させることによって、何をテーマにしようとしたのか、問題の設定方法、論の構成の組み立て、などといった問題を自覚してもらうための仕掛けである。修士から博士課程まで少人数ながら、他の分野の方も参加しての研究発表の場となった。「会報」も発刊することにし、私自身がワープロで入力し、卒業生からの原稿ももらって印刷をし配布もした。

当時の研究環境は、パソコンもなく、ましてインターネットなど存在しないという時代であった。プリントをするコピー機は存在したとはいえ、あらたな資料の作成となると、和文タイプライターかガリ版刷りというのが一般的であった。一九八二年の三月から二ヶ月間、キャンベラのオーストラリア国立大学に籍を置いていた折、同大学の教授が入力した文字が記録できるというワープロを用いていたが、私などには縁遠いものだとすっかり思っていた。すこし調べてみると、一九八〇年五月に富士通が日本語ワープロのオアシスを発売、一九八一年八月には小型化と軽量化

がはかられた機種が一五九万円、一九八三年四月には四八万円という廉価機が発売されたとあるものの、とても個人が所持できるような機器ではなかった。ただ、国文学研究資料館でもワープロの導入とか、データベースの勉強会もあり、参加もしていたのだが、個人的にはそれほど関心を持たないままであった。

論の内容が未熟であっても、外に向かって口頭で発表し原稿化すると、自分の論文の欠点や問題点を自覚するようになり、そこから自己の研究の鍛錬が始まるとの信念のもと、研究会から研究誌の『詞林』を発刊することにし、これまた毎号院生に編集させることにした。年二冊の発刊を義務づけ、編集の実務を身に覚えるとともに、各自が原稿を読むことによってその評価の判断もできるようにとの配慮による。

私はオアシスを購入して研究室に置き、学生に自由に使用できるようにし、自分で入力させることにした。原稿から編集、印刷、発行までの雑誌の発刊といったプロセスは、これからの研究者には必要になってくるとの思いによる。ただ、私は二四ドットのプリンターしか持っていなく、もうすこし鮮明に印刷するには、当時出始めたばかりのレーザープリンターを用いたかった。人を介して富士通のショールームに飾ってある一台三百万円というレーザープリンターを、試験的に印刷してほしいと依頼し、私は八インチのフロッピーを持って行くというややあつかましいこともした。このようにしてできあがったのが『詞林』創刊号の版下である。第二号は、同じ手も使えないので、二四ドットのプリンターでの版下、三号からはレーザープリンターを導入することができた。『詞林』の創刊は、私が大阪大学に赴任して三年目、国語国文学会を編成する一年前の一九八七年三月であった。

年二冊の刊行、博士課程へ進学するには修士課程の間に『詞林』に論文一本と、全国的な学会で研究発表をするのをなかば義務づけてもいた。未熟な論文もあったのであろうが、それは自らがもっとも自覚するであろうし、経験を積むことが成長へとつながるとの思いがあった。大学院での一年間の演習が終わると、その四月には論文にまとめるとか、特集号を組み、また留学生にも原稿を書かせ国際的な視野を取り入れる工夫もしていた。その後、ワープロの普及とともに、この種の研究誌が各大学で創刊されるようにもなるが、『詞林』はそのさきがけ的な存在であったと思う。現在では、均質で鮮明な誌面によって五四号まで滞りなく継続しているのをみると、隔世の感を覚える。

四　大学院大学への機構改革

大学院重点化という新たな課題が生じたのは一九九〇年（平成二）からで、この年に東京大学（自然科学系）が、二年後には京都大学法学部が実現する。従来の大学は学部の教員が大学院生を教えるという組織であったのを、大学院に籍を置き、学部を教えるシステムへの変更で、これによってより高度な専門教育研究をするという、大学院重点化へ移行することである。同じことのようではあるが、大学院大学になると、学生数、教員の増員と、予

算規模が大きくなってくる。もっとも、後になると文科省の予算枠の逼迫から、名称変更だけとなり、後発の大学にはあまりメリットはなくなってしまう。

大阪大学でもこの動きがあり、一九九二年に文学部内に「大学院改革小委員会」が発足し、翌年の一月四日には早くもこの年の第一回委員会が開かれている。私の記録によると、一月一四日、二月二四日と続き、三月九日には「大学院改革委員会」と名称を変え、大きな目標としては教養部を解体して人文系教員の文学部への吸収と、大学院大学化への推進であった。この過程で、どのような事情によるのかは定かでないが、私が委員長を務めるようになっており、以後四年の間、この委員会の運営と資料作りに没頭していった。大学内でも、文学部の申請は優先度が低かったようで、幾度か学部長と本部に説明に出かけており、大学院の組織作りは長期戦となってしまう。

重点化にいたる具体的な様相を確認するため、おこがましいのだが、私個人の記録から最終年のあたりを拾うと、「大学院重点化の資料作りの忙しいこと。…重点化の資料もテキストファイルで提出するよう求めたのだが、その形式もまちまちである。会計の方にしてもらうのも時間がかかりそうなので、結局自分で整理し、統一する作業をする。八日は文部省へ行くため、それより数日前には説明資料を作る必要がある」（一九九六年二月二八日）と、各講座に各種の資料の提出を求め、事務にまかせるのではなく、最終的には私が統一した文章としてまとめていた。

「午後から学部長、事務長、会計係長の四人で資料内容について検討。新たな項目も加える必要が生じてくる。四時ころから再び部屋にもどって資料の整理、一度印刷したもののページがあわず、ふたたび印刷、続いて二冊目、家に帰ると夜の一〇時」（三月五日）。このように夜も研究室に残っての作業が続いていた。事務の方も夜遅くまで待機し、茶菓を差し入れてもらったこともある。この年はうまくことが運ばなかったようで、さらに記録をたどると、「大学本部に説明に行く、今週が文科省への資料提出締切」（同年一〇月一六日）、「今日も、朝から夜まで、ずっと重点化の資料作り。学部カリキュラムの表を作成」（同年一二月三〇日）、「この数日、毎日のように続けている大学院重点化の資料、ほぼ見通しがつくようになった。今日も、ほとんど一日かけたものの、まだ終ってはいない」（同年一二月三一日）と、大晦日まで大学で作業を続けている。このころの土日は、雑務でわずらわされることがないため、大学の研究室で過ごして資料作りをしていた。この日などは、大学院重点化にともない、学部のカリキュラム編成も作り直さなければならず、それに没頭もしていたようだ。

年が明けた一月には、「重点化の資料もほぼできあがった。その整理」（一九九七年一月六日）とし、「昨日は、経理部長とのヒアリングで、大学院重点化要旨の訂正が必要となった。今朝は九時半には家を出て大学へ」（一九九七年三月一日）と、朝も早めに大学に出かけ、最後まで資料の訂正をしている。「一時半から

三時まで、文部省の役人三人に説明と質疑応答、疲れてしまう。…本部の経理部長、課長補佐、係長も同席」（同年三月一二日）と文科省に出かけての説明をする。この後は飛ばすが、やっと努力が報われたのは、「来年度予算案の内示が二〇日にあり、阪大関係は今日夕方に判明とのことであった。…直木会計係長から電話があったようで、文部学の大学院重点化は計画通り通ったとのことである」（同年一二月二四日）と、文科省から大蔵省に提出された概算要求書に、大阪大学文学部重点化案が挿入されたというのである。各省庁から提出された概算要求書を、さらに査定して、年末には大蔵原案ができあがるのだが、大半の項目は大蔵省が受領した段階で予算化されるのが通常であるため、国会での審議があるにしても、これでほぼ決まったともいえるであろう。「部長が来て喜びのことば。文学部五〇年の歴史において最大の事件だという」（同年一二月二五日）と、当時の学部長であった独文の中村さんが私の部屋を訪れ、大学院重点化がほぼ実現するにいたったことを大喜びする。

ただこれですんなりと決まったわけではなく、最終的には大蔵省と文科省との調整があり、一度に重点化するには経費がかかりすぎると、「文化形態論専攻」は一九九八年度に、「文化表現論専攻」は一年後に発足することで決着する。このようにして、大阪大学文学研究科は重点化へと移行するとともに、教養部の一部も取り込み、旧来の一講座三人（教授・助教授・助手）という枠組みを崩し、大講座化していくことになる。

現在からの個人的な感想としては、この組織編成に私はどれほどのエネルギーを消費したものか、これがなければ本が二三冊は書けたのではないか、などとの思いもするが、私にとっては大学の組織のあり方、いかに研究者を養成し、社会との接点を持ちながらも存在の意義を訴え、研究の成果を社会に還元するのか、その重要性をあらためて確認することになった。一方では、資料作りに時間をとられたことで、学生への授業や指導が相対的に手薄になったことは申し訳ない思いでもある。

五　21世紀ＣＯＥプログラムによる国際化方策

文科省の「大学の構造改革方針」により、研究拠点形成補助金の予算が組まれ、二〇〇二年（平成一四）から開始される案が発表された。これが「21世紀ＣＯＥプログラム」で、高額の研究費補助金の支給だけに、内容も高度な水準を提示し、その成果も示さなければならない。かなり厳しい審査と競争が予想されたとはいえ、大学院重点化を果たした文学研究科としても申請をすることになった。単独では困難との判断により、大学の方針もあって人間科学研究科と連携することになった。当時、私は評議員をしていた関係もあり、避けることもできないままこの計画の委員長になってしまう。これもなかなか説明しづらいのだが、全教員に研究業績の提出を求め、学部長などとも検討を加え、顕著な推進委員として一〇人を選抜するという、かなり強引な手法もとった。その教員を中核とし、意見の集約、集められた資料をまとめて申

請書を作成する。書類上は文化表現論専攻が主担当となり、タイトルは「インターフェイスの人文学」とし、学部長や本部の方などと文科省でのヒアリングに臨む。

私はここで、かねてのテーマにもしていた日本文学の国際化という課題も織り込み、人文学の各分野を総合して構造改革を志向するという内容とする。当時の公表された資料によると、申請した大学は一六三校、四六四件の提出があったようで、ヒアリングでの厳しい質問とか会議の雰囲気から、これは却下される可能性もあると、なかば断念もしかけていた。ところがこの申請がパスし、初年度は途中から開始となったため一千万円余、二年目の二〇〇三年には千六百万円という交付金、研究の方針の具体化とか推進方法も具体化していく。初年度に認められたのは、人文学では一五大学二〇件であった。

国文学としては国際化という方針のもとに、たまたまイタリアでＥＡＪＳが開かれる年でもあったことにより、私は助手と研究生とを連れて出かけ、スロバキアなども訪れた。ＥＡＪＳはヨーロッパ各国をめぐりながら、三年に一度開かれる日本研究の規模の大きな国際集会で、ヨーロッパはもちろん、アメリカやアジアからの参加者も多く、私はかねて参加していたこともあり、国際的な人脈作りもあって二人に同行を求めもした。

それとともに、国内はもちろん、アメリカ、カナダ、ヨーロッパから研究者を招いての日本文学の国際集会を開催し、「国際化の中の日本文学研究」「日本文学　翻訳の可能性」「世界文学としての源氏物語」というテーマのもとで三年間継続もし、それぞれの成果を風間書房から出版もした。

このように記録をたどりながらまとめていると、私は大阪大学在任中、何をしていたのだろうかとの反省の思いもする。絶えず組織作りをし、書類をまとめ、申請し、雑誌や図書にして成果を公表するという、いわば走り続けてきた感じでもある。大阪大学の退任後はこれに追い打ちをかけるような多忙さに身を置くことになり、21世紀ＣＯＥプログラムの「革新的な学術分野審査・評価部会委員」に任命され、書類を読み、研究チームのヒアリングを審査するという立場になってしまい、各大学の視察にまで出かけることもあった。また日本学術振興会の日本研究のテーマのもとで、各大学から申請された数多くの書類を読み、審査し、ヒアリングもするという任務、これは三年間委員長を続けてもいた。ほかにも日本学術会議学術分化会の委員長、大学評価の委員長などと、いくつも委員会が重なり、大阪にもどって後も、時には月に四回会議で上京するという生活を続けてきた。その上に立って我が身を省みると、大阪大学の国語国文学会にささやかながら貢献してきたのではないかと自認し、自己満足をしているありさまでもある。

（いい・はるき　本学名誉教授　阪急文化財団理事・館長）

『語文』稗史

福田安典

私が国文の研究室に入ったのは昭和五十九年四月、ちょうど三十年前になる。その間に平成四年から六年まで助手を務めた。今年の国語国文学会のシンポジウムのテーマが『語文』三十年の回顧ということで、時宜にも適い、「正史」は諸先生に譲るとして、稗官（私）の見た『語文』の歴史を「稗史」としてまとめることをお許しいただきたい。

昭和五十九年というのは『語文』第四十三輯刊行の年である。『語文』は第四十一輯以後に年二回刊行実施（文学・語学交互）、大阪大学国語国文学会編集となったのは、文進堂から阪大に編集が移った第四十九輯以後であるので、その端境期に大学院に進んだこととなる。

第四十九輯以後に研究室に入り、当たり前のように研究論文を掲載しうる『語文』世代からは想像が出来ないであろうが、現在百一輯までを数えるこの雑誌は、その前半は苦労して出版された「学術誌」であったのである、ということは、阪大の教官の忘年会には毎年文進堂の前田さんの慰労会を兼ねて堂島の鰻屋で行われることが恒例であったこと、助手の重要な仕事として『語文』のバックナンバーを院生に売りつけることがあったことの二点を示せば十分であろうか。

以下の論の構成は、まず私が研究室に入るまでと、入って以後に二分して『語文』の史的変遷を追ってみたい。なお、本文中の人名は基本的には敬称を略すが、時折「先生」などの敬称を付す。その不統一もすべて筆者が責を負うもので、編集子に責はないことを諒とされたい。

第Ⅰ期　『語文』第四十三輯（昭和五十九年六月十五日）まで

昭和二十五年十一月十五日、第一輯（奥付は第一号）が創刊された。定價は四十円、送料六円、自由投稿制度で、文進堂（前田勘次）、邦進社（前田春雄）から刊行された。林和比古先生の編輯後記には、

> 大阪から一つぐらゐ國文学誌が出てもよからうと話しあつた末、とにかく最初は研究室の者で書かう、あとは大方の寄稿をまたうといふことになつて、第一輯の準備にとりかゝつた。
>
> われわれは学風とか学派とかそんなことは問はない。いやしくも價値ありと認める論文はできる限り掲載する。また掲載論文等に対する批評質疑も採るべきものは公表したいと思ふ。

とあって、その創刊時における昂ぶりと意欲を今に伝えている。島津忠夫先生が第一輯からの会員であることからわかるように、阪大には拘らず広く会員を募っての「学術誌」であった。

誌名は、

> 小島吉雄博士の命名にかかる。文字も同博士が嵯峨本徒然草により集字された。

（林和比古先生　編輯後記）

本誌の題字は嵯峨本徒然草から集字したが、それについては京都の鈴鹿三七氏の御助力を得たことを深謝したいと思ふ。

（田中裕先生　第二輯　編輯後記）

とあって、小島吉雄先生の命名により、『鈴鹿本今昔物語』の旧所蔵者にして『勅版集影』の著のある鈴鹿三七翁の協力を得て嵯峨本徒然草から集字して、今も本誌の刷り題簽として瀟洒に表紙の顔として受け継がれている。

この時期の『語文』の特徴としては、気の利いた特集が編まれていたことである。以下に、御退官記念号を除いた特輯号を取り挙げてみる。

【契沖特集】（昭和二十七年七月　『語文』第三輯）

昭和二十五年一月二十六日、朝日新聞社大阪本社講堂で契沖顕彰の講演会があり、小島吉雄先生が「大阪の和学」でご講演。それを承けて『語文』第二輯で円珠庵再建の趣旨と、募金募集を掲載、昭和二十六年は契沖没後二百五十年であった。それに合わせて大阪の三越でも展覧会が開催（五月）されている。島津先生にお聞きしたところでは、この講演会の演題の「大阪の和学」は、小島先生が『語文』立ち上げに関して特に拘られたテーマとのことである。後の『語文』に、大阪関係の資料の翻刻が掲載されるのはその流れからである。この「大阪の和学」というテーマは、別に今の『語文』が受け継がなくてもよいし、将来的にも『語文』に強請するものでもないが、記憶されてしかるべきかと思う。

そして、昭和二十六年七月二十五日刊行『語文』第三輯は「契沖阿闍梨特輯号」として編まれる。執筆陣は、春日政治・高木市之助・久松潜一・澤瀉久孝・小島吉雄・宇佐美喜三八・八木毅で、冒頭に円珠庵の写真がある。

【懐徳堂の和学】（昭和二十九年一月　『語文』第十輯）

『語文』第十輯を記念して、「懐徳堂の和学」が特輯された。執筆陣は小島吉雄・宇佐美喜三八・八木毅・田中裕、「和学書目並解説」が八木毅である。

小島吉雄先生が、編輯後記において、

ここに第十輯を記念して特に大阪和学の特輯号とし、ささやかながら自祝することにした。今回の主題は五井蘭州を中心とした和学であるが、

と記されるように、この十輯が当時の教員方に安堵と自信と与えた祝賀的なものであったことは田中裕先生のご講演（確か東京書籍であったかと思う）でお聞きした。このご講演が「語文五十集を迎へるのに寄せて―創刊のころ―」（『語文』五十輯（昭和六十三年三月）として活字化されている。

この特集号の特徴は大きく二つである。まず、八木毅先生が編輯後記で、

本輯は懐徳堂の和学に関する特輯であるが、懐徳堂は現在、大阪大学文学部内に移り、その蔵書の補完と事業の継続は同

大学で行うことになっている。

と書かれるように阪大の蔵書を用いた特輯であったことである。爾来、阪大は蔵書が乏しく、反面近隣の大学には羨むほどの蔵書があり、近隣の諸機関にも多くの稀覯書が蔵されるという「不幸」な立地条件であった。その中で、先学・先達は阪大の蔵書充実と整理とに苦心惨憺されてきた。記念すべき『語文』十輯で、阪大蔵書を高らかに謳いあげたこの号に勇気づけられた学生は私一人ではないと思う。

第二の特徴としては、この号が「懐徳堂」の「和学」であったことである。浅学無智な院生であった私は、懐徳堂は漢学の塾と認識していた。上田秋成との関わりは承知していたが、懐徳堂の特輯としては「漢学」が当たり前であろうと決めつけていたのである。昭和二十九年段階の研究に於いて、懐徳堂を扱いながら大阪の和学を論じたこの号は、私にとって大きな衝撃があり、その後の私の研究に大きな示唆を与えてくれた。偉そうに後輩に説諭できる立場にはないが、『語文』を単なる業績発表のためのそこらにある大学雑誌とは見ずに、専門以外も含めて過去の『語文』を繙くことをお勧めしたい。また、自分が『語文』に書く際には、名も知らぬ後輩達が読んでくれることを意識していただきたい。

【連歌研究特集】（昭和三十年三月　『語文』第十四輯）

『語文』第十四輯は連歌特集であった。執筆陣は小西甚一・島津忠夫・田中裕。島津先生の『語文』デビューだと思う。この連歌特集に際して、田中裕先生は、

連歌が、国文学研究においても最も研究史の浅いものの一つに属することには種々の理由が重なつてゐると思ふ。（中略）連歌が現代の文学形式として蘇りうるとか、蘇らねばならないとは私も考へてゐない。（中略）この種の現代的意義・利害はしばらくは別としても、せめて中世の精神、感情にとつて連歌とは何であつたかといふことは、それだけで十分考察にたへ、また、解明されねばならない課題であらう。

と記されている。今は紙面の関係で必要な箇所のみを抜き出したが、この田中先生の文章はいかにも田中先生という滋味があり、また特集号の内容もえも言われぬ先生の世界観を提示しておられる。一読の価値ありであろう。

※

この第Ⅰ期における特徴は、大阪大学所蔵の資料目録や翻刻、影印、紹介が不定期ながらも多かったことである。第三十三輯「編輯後記」（昭和五十二年六月）には、

当研究室には、土橋・忍頂寺・笹野の諸文庫の本をはじめ、善本が少なからず所蔵されています。それらも順次影印していきたいと考えております。

とあって、実際には『手繰舟』（土橋文庫）の影印が三十三輯（昭和五十二年六月）から三十七輯（昭和五十四年）まで掲載された。現在では、インターネットなどで原本の写真が閲覧できるが、この時期に翻刻ではなく、貴重本の影印が一雑誌に掲載され

ることの意義は大きかったであろうし、費用や手間を含めてかなりのご心労があったと愚察している。

この時期に特筆すべきは、土橋文庫の蔵書目録の掲載である。順を追って挙げると、

第十二輯（昭和二十九年八月）「土橋家旧蔵書目録（一）」
田中裕の解説。連歌論書・連歌撰集・句集・西山宗因連歌作品

第十三輯（昭和二十九年十二月）「土橋家旧蔵書目録（二）」
連歌作品

第十四輯（昭和三十年三月十五日）「土橋家旧蔵本知連抄（飜刻）」（田中裕）

第十五輯（昭和三十年七月）「土橋家旧蔵書目（三）」
河瀬菅雄著述

という連載があった。この流れに先の『手繰舟』の影印掲載が続くのである。

また、この時期の「語文外史」として、『文車』（阪大国文大学院研究室）と、『語文叢誌』（昭和五十六年三月）を挙げたい。『文車（ふぐるま）』は昭和二十三年から昭和四十三年まで十九号続いた。『語文叢誌』は田中裕先生の御退職を記念する雑誌であった。

第Ⅱ期　『語文』四十三輯（昭和五十九年六月）以後

稗官が研究室に入ってからの『語文』はこれまたそれ相応の若い方に語っていただいた方がよいと思うが、紆余曲折の末に研究室編の雑誌となって、気軽に院生が書けるようになって、第Ⅰ期とは趣が変わったが、それでも田中裕先生の「語文五十集を迎へるのに寄せて―創刊のころ―」（『語文』五十輯、昭和六十三年三月）があり、その輯に「語文總目次」も掲載してあって、第Ⅰ期との繋がりはあった。

第Ⅰ期のような特輯号や阪大蔵の資料紹介は減ったが、それでも、

【『咸陽宮』特輯】（平成五年五月『語文』第六十輯）
（執筆陣）伊井春樹・中本大・近本謙介

【文学部創立五十周年記念　忍頂寺文庫特輯】（平成十年五月『語文』第七十輯）
（執筆陣）後藤昭雄・青田寿美・内田宗一・尾崎千佳・川端咲子・近衛典子・富田志津子・福田安典・正木ゆみ・鷲原知良

【ワークショップ〈会話文と地の文に関する通時的・多角的研究とその展開〉報告】（平成二十年十二月『語文』第九十一輯）
（執筆陣）浜田泰彦・黒木邦彦ほか・鳩野恵介ほか・加藤昌嘉・斎藤理生
（傍聴記）飯倉洋一・深澤愛

という特輯があった。

また、大阪大学所蔵資料の紹介も、第四十五輯（昭和六十年四

月）～第五十輯（昭和六十三年三月）で「大阪大学国文学研究室蔵　後鳥羽院御集（翻刻）一～五」（一は山本一、二から五は山本一と佐藤明浩連名）がある。

土橋文庫も第四十五輯（昭和六十年四月）に過去の特輯頒布の案内があり、第五十一輯（昭和六十三年十月）には「含翠堂文庫本鷺流狂言『八句連歌』」（解説・翻刻、島津忠夫・川崎剛志）があった。

この時期の阪大の大きな業績としては、本邦屈指の蔵書家横山重氏の旧蔵書のうち、演劇関係のものが信多純一先生他のご尽力により大阪大学に「赤木文庫」として入ったことである。ところが、この赤木文庫については、第四十六輯（昭和六十年十二月）に大阪大学附属図書館刊『赤木文庫（古浄瑠璃）目録』頒布の案内が掲載されるのみで、特輯が編まれていない。これは、小野文庫も同然であって『語文』の進んだ一つの方向性を示唆しているかと思われる。

※

最後に、筆者の関わった「文学部創立五十周年記念　忍頂寺文庫特輯」（『語文』第七十輯）について言及して拙稿を終えたい。

阪大に忍頂寺文庫のあることは夙に有名で、折しも近世文学会を阪大で引き受けることになり、忍頂寺文庫の展示および解説をすることとなった。忍頂寺文庫の重要性を説いていたのは故時松孝文さんであったが、当時助手であった筆者はその重要性がわからず、恥ずかしながら忍頂寺を「ニンチョウジ」と清んで読んでいて、まさか「ニンジョウジ」と濁るとは思いもしなかったほど無智無自覚であったのである。まして、私自身が河内の出でもあり、忍頂寺文庫に多く蔵される「よしこの」や「どどいつ」などは祖父の酔後の十八番であったので、大学でかかる歌謡や俗文芸を研究することにある種の違和感もあった。それでも、時松さんの熱い思いもあり、当時の学界の雰囲気もあって、忍頂寺研究に着手するようになった。

その後、肥田晧三先生、土田衛先生、荻野清さんなど本当に多くの先生方に教わりながら、忍頂寺文庫の本を取り敢えず閲覧した。忍頂寺務翁の著作も読むようになり、これは、やはり『語文』で特輯を編みたいと願うようになった。その時に脳裏にあったのは、

◎『語文』は特輯号を編んだ雑誌であること
◎大阪大学文学部の文庫を取り上げてきたこと
◎翻刻を掲載してきた雑誌であること

であった。そこで、なんとなく周囲の「やる気」ありそうな院生に語らったところ、近世文学を専攻とする院生はもちろん、国語学や近代文学を専攻とする院生も話に乗ってくれて、ことは一気に成就した。そのメンバーが今まで忍頂寺文庫のことを続けていることは阪大の学風の一つであろう。

この特輯号は余波がある。できあがった『語文』をもって淡路の引攝寺に墓参りに伺った時に、ご住職から忍頂寺務翁のご令嬢小野麗子さんの御消息、及びいまだ手元にお持ちの和書について

の情報を承った。それが発展して、国文学研究資料館との共同研究、仙台の忍頂寺晃嗣氏との交渉を持つに至る。その経緯で小野麗子旧蔵書の搬入については伊井春樹先生にはご配慮賜ったし、何より飯倉洋一先生には格段のご苦労をお掛けした。その当時の助手であった米谷隆史氏や内田宗一氏にも感謝申し上げる。ともかく、その余波をあらあら挙げれば、

1　後に忍頂寺文庫の分かれである「小野文庫」を発見、大阪大学へ入る。

2　国文学研究資料館と大阪大学大学院文学研究科の研究連携事業へと発展。

3　仙台の忍頂寺家保存資料の発見・調査。

4　成果

『忍頂寺文庫・小野文庫の研究』1～5
（平成十六年～二十一年）

シンポジウム「近世風俗文化学の形成―忍頂寺務と忍頂寺文庫・小野文庫」
（平成二十年十月）

『近世風俗文化学の形成―忍頂寺務草稿および旧蔵書とその周辺』
（国文学研究資料館、平成二十四年）

『大阪大学附属図書館所蔵　忍頂寺文庫目録』
（大阪大学附属図書館　平成二十三年）

他

となる。

以上、おもに特輯号を中心に『語文』の歴史を恣意的に編述してきた。『語文』はこれからも阪大の院生が中心の業績発表誌であっていいとは思う。しかしながら、原『語文』の持っていた、大阪の、特に阪大からの学問発信の要素は残ってほしいと願う。無い物ねだりながら、ジャンルや年齢、学閥を超えて老いも若きもが集うような、草創期の熱気を彷彿させる『語文』特輯号をもう一度読んでみたい。

本誌の弥栄をお祈り申し上げる。

（ふくだ・やすのり　日本女子大学教授）

幸運なめぐりあわせ

仁木夏実

大学に入って、研究室に入ってみたら先輩がたくさんいて、研究室をすでに卒業した先輩の先輩という人もたくさんいて、どの人もおもしろかったり、やさしかったり、厳しかったりして一緒にいると本当に楽しかった。その後を夢中になってコロコロついていくようにしてきたのでいつまでも後輩気分が抜けない。

ところが指折り数えてみると私が大学に入学して今年でちょうど二〇年が経っていたのだった。「この三〇年」のちょうど三分の二。それなりにボリュームのある年月ではあり、振り返ればそれなりに節目となる時期にあたっていたように思える。

私が大阪大学に入学したのは平成六年（一九九四）である。二年生となった翌春国語国文学研究室に配属となり、平成一〇年（一九九八）には学部を卒業し、大学院に進学した。これは平成六年の教養部廃止、翌年の人文学科の創設、平成一〇年の大学院重点化完了という文学部の組織全体の再編成の時期とぴったりと重なっている。ちなみに、数年のブランクを経て助教として大阪大学に戻ってきた平成一九年（二〇〇七）には大阪外国語大学との統合があり、翌二〇年は研究室の移転で大わらわになった。偶然と言えばそれまでだけれど、大きな変化の時に、特に役に立つという訳でもなくただ居合わせてしまうというめぐりあわせのようである。

二年生から研究室に配属されるのは私の学年が最初で、それまでは三年生からだった。ということは、私が配属になった年の春は、一つ上の三年生と二年生が同時に研究室に配属になったということである。大学に入学して多彩な講義に目がくらむような思いをし、その興奮も覚めやらぬ勢いで自分たちと同時に研究室に乗り込んできた後輩を当時の三年生の方々はどうご覧になられたか。騒々しく研究室に長っ尻を決め込んだ自覚があるだけに、いまだに少し恥ずかしく、申し訳ないような気持ちになる。

今思えば、教養部から山口堯二先生、後藤昭雄先生、渡邉志津子先生、荒木浩先生を迎え、伊井先生は大学院重点化のお仕事に奔走され、研究室全体も騒然としていた。

この文学部の再編成の流れは、研究室にこれまでになく多くの人がやって来るということを意味していた。特に大学院重点化の結果、他大学からの進学者や留学生を含め、大学院生の数の急激な増加は研究室、そして国語国文学会の雰囲気、性格に大きな変化をもたらしたように思う。もちろん、私が実際に経験したのは変化した後だけなのだが、先生や先輩からうかがうこれ以前の雰囲気はより親密なものであったように感じられる。ゼミの数も少なく、進学するのはそれぞれのゼミで年に一名、他大学からの進学者は大抵入学以前に研究生を一年間経験していたのが、教養部から移られた先生方のゼミが増え、社会人入学の方などいろいろな経歴の人が行き交う、よりオープンな場になった。

この三〇年の間で国語国文学会の画期があるとすればこの時期

と言えるのではないだろうか。国語国文学会は学術雑誌を刊行する学会であると同時に、同窓会としての性格も併せ持つわけであるが、この変化にどう対応してゆくのか、今回のような節目に改めて考えても良いのではないかと思う。

こうした研究室全体、そして国語国文学会の変化を背景としたこの三十年の『語文』を取り巻く状況でもっとも大きな変化は、研究室関係の雑誌の増加である。現在研究室近辺から刊行されている雑誌としてはこれ以前にすでに『語文』に加えて文学部の『待兼山論叢』、大阪大学古代中世文学会の『詞林』があったが、平成一五年（二〇〇三）には『阪大近代文学研究』、翌一六年（二〇〇四）には『上方文藝研究』が創刊された。これらとの競合の中でいかに存在感を維持するか、これが『語文』が現在直面している問題点であろう。

その問題を考える上でヒントになるのではないかと思うのが、『語文』第九一輯（二〇〇八）に掲載された「特集　共同研究「会話文と地の文に関する通時的・多角的研究とその展開」である。

これは平成二〇年度の国語国文学会総会で行った公開ワークショップの活字化である。平成一九年の春、研究室の会議で来年度の総会では何か院生主体の企画が出来ないかという話になり、『語文』の編集委員だった黒木邦彦君に打診してみたところ、打てば響くという感じでOBの加藤昌嘉さんの論文「「と」の気脈―平安和文における、発話／地／心内の境―」（『詞林』第四〇号）の名を挙げ、国語学的に捉え直したいと提案をしてくれたのが始まりだった。その後は趣意書を作って日本文学・国語学を問わず院生の有志を募り、中古・近世・近代の三つの作業チームに分かれて調査・分析を行い、秋には数回公開研究会を開催して作業の途中経過を報告し、年明けて一月の総会で公開ワークショップを開催した。さらに『語文』に特集を組み、三つの作業チームの研究報告に加え、企画の担当者荒木浩先生による共同研究の由来、公開ワークショップの基調報告者加藤さんと齋藤理生君の研究報告、飯倉洋一先生と深澤愛氏の傍聴記二本を掲載した。『語文』の刊行まで一年以上にわたる、こうした企画としては異例の長さで多くの院生を巻き込んだ、一種のお祭りだった。助教としてサポートをしつつ、ほどよい距離からその熱に当てられていたことが今は懐かしい。得難く、幸運なめぐりあわせだった。

OBの活躍に刺激を受けた院生が主体となり、そのOBをはじめとする国語国文学会員と交流しながら、もちろん、時には基調報告者のお二人から研究に関することだけでなく企画の進行などについてもかなり厳しいおしかりを受けることもあり、共同研究者の院生にはハードな一年であったろうが、ともかくも一つの特集をなし得たということは、院生にとってだけでなく、国語国文学会と『語文』にとっても大きな意義があったのではないか。

秋の公開研究会の予告を同窓会報に小さく載せたところ、研究室にOBの方から自分も出席しても良いかと問い合わせのお電話

があり、夕方遅くの会だったにも関わらず来て下さった。時間を取りすぎるということで午前中に開催された公開ワークショップには予想以上に多くの会員が参加して下さった。そうしたことを目の当たりにする中で私は、『語文』や会報を作って送付する作業の向こうに多くの会員の方々の顔を思い浮かべることを忘れかけていたのではないかと自問した。そして、ちゃんとボールを投げれば会員の方々にはちゃんと届いているんだな、と思ったのを覚えている。そうすれば総会も『語文』も幅広い専門分野の会員の方々との交流の場になるのである。この企画はそうした可能性の一つを示してくれたように思う。

長いタイトルの共同研究だった。特に「通時的・多角的研究」のあたりはもう少しすっきり出来ないのかと何度か口を挟んだ覚えもある。しかし、今見直してみると『語文』のあり方を示しているようにも思える。『語文』は「通時的」で「多角的」な学術雑誌で良いのだ。そのような会員の学問的交流の場なのだから。

研究のたこつぼ化への危惧は今や学界全体を覆うものとなっている。そうした中で国語学と日本文学を研究する研究室が発行する学術雑誌として、『語文』には百輯という節目を越えて、会員に、同じ専門分野の先輩後輩という縦のつながりだけでなく、異なる専門分野の学生・院生同士という横のつながり、専門を超えた先輩後輩を風通しよく結びつける学問的交流の場であり続けてほしい。そしていつか同じようなボールが投げかけられるめぐりあわせになった時、きちんとそれを受け止め、投げ返すことのできる「先輩」に自分がなれていたら、と思う。

（にき・なつみ　明石工業高等専門学校准教授）

『語文』私史

出原隆俊

近年（いつ頃からか記憶がありません）は、教員が順番に一人執筆するのが慣例になっている。ある時点での在職教員の数などにもかかわっているのだろうが、もはや伊井春樹先生や後藤昭雄先生よりも在職年が長くなった私が、『語文』に発表した数、五本はこれらの先生方に比して多くはない。だとすれば、ローテーションによって私は助かったのだろうか。「助かった」と、いささか不穏当な物謂いをしたが、もちろん、何も私に限ったことではないのだが、いろいろな場に顔出しせざるを得ない状態が、そうさせるのであろう。

掲載された最初が五十五輯（一九九〇年十一月）で「「源叔父」の方法」である。これは演習で独歩作品を取り上げる機会があったことと関連していたと思う。当時はテクストを丸ごと読もうとしないという独歩研究者へのいら立ちから、作品の展開がまるで舞台の上で進行するようなという観点での論考であった。独歩についてはその後に、一葉と同様に鷗外の『水沫集』の中の「埋木」を読んでいて、それが主人公の老人の容貌などにそっくりそのまま転用されていることや、さらに後に、漱石作品に独歩の作品が投影されているということの指摘へとつながるのだが、『語文』に発表当時には全くそのことは見えていなかった。『語文』を私史として振り返ろうとした時、我ながらそれなりの感慨に捕らわれる。

その次が七十一輯「鷗外作品における〈狂気〉」（一九九八年一〇月）である。これは、〈狂気〉の文学史の一環のものである。これは「洋行と〝からゆき〟―反「舞姫」小説の位相―」（『文学』一九八五年三月）から本格的に始まる私の鷗外論の一つということになるが、その間にいくつかの鷗外論を発表していて、この時期の中心的関心として鷗外があったことがうかがえる。しかも、私の『語文』での最も新しいものは、そして最後になるかもと考えられるものは、九十八輯（二〇一二年六月）の「傍観者の系譜」で、これも鷗外が中心である。さらに「裏側から読む「心」」（二〇〇七年十二月）も漱石の「心」に鷗外の翻訳小説が〈借用〉されていることの指摘を含んでいる。八十・八十一輯「三島作品における〈内部〉と〈外部〉―「金閣寺」を中心に」（二〇〇四年二月）のように鷗外とは全く無縁のものもあるが、『語文』と私のかかわりを個人的に考えた時、鷗外との関係が多いことに気づく。

このように見てくると、今度は逆に、私の研究対象の中心的なもののひとつである一葉に関する私の論考が『語文』には皆無であることに思い至る。これはどういうことなのか。一葉論と『語文』との係わりでは、九十～九十八輯にかけて、水野亜紀子さん、坂井二三絵さん、金侖姫さんが立て続けに一葉論を発表している。これは私が彼女たちのために一葉論を遠慮していたというわけでは、無論、決して、断じてない。指導教員の関心の対象の移動と

奇妙な対応というしかない。そんな私が本年度の講義で、「注釈」ということ、をめぐって一葉作品の再検討を始めている。これは私の仕舞支度として計画したものではない（最近は〈終活〉なる言葉も見かけるが）。昨年、一葉研究会で講演を依頼された際に、少年の「廓内からの帰り」という「たけくらべ」の一節が〈朝帰り〉と解釈するのが定説になっていることに異議申し立てしたものが契機となっている。出たとこ勝負で自分の関心が揺れるのと、鷗外生誕百五十年などの出版社の企画に乗っかることなどの間でふらつくことが『語文』との係わりを考えた時に思い当たるのである。そういえば、もう一つの軸であった透谷にいつ帰りつくのかとも思う。

さて、私史と称する駄文を書き連ねてきたが、研究室の代表者として言えば、昨今の大学院生の減少（文学研究科全体の問題である）が『語文』への執筆者の問題と重なっていることを報告せざるを得ない。これは『詞林』のほかに『阪大近代文学研究』や『上方文藝研究』の刊行等の発表媒体の拡充と重層することでもある。簡単に結論が出ることではないが、ぜひとも『語文』をお読みの方々のお力添えをお願いしたいということで、この一文の終わりとさせていただきます。

（いずはら・たかとし　本学大学院教授）